

---

# よの子ちゃんと雑談

手羽崎 ささみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よの子ちゃんと雑談

### 【Nコード】

N0563X

### 【作者名】

手羽崎 ささみ

### 【あらすじ】

主人公の「俺」が、よの子ちゃんという女の子と話したあれやこれやの雑談小説。お喋りしながら修学旅行が始まります。何でもない、つまらない、オチもない、三拍子揃ったゆるーい会話を繰り広げていきます。

…明るくて萌えっばい小説を書けるようになるのが、作者の目標です。

## 修学旅行のバスの中

今日は快晴、気分も上々。

修学旅行のバスの中、俺は目的地に着くまで眠っていたように、ひたすら眼を瞑っていた。

「ねえ、につきー。起きてる？」

隣の席からそんな声が聞こえてくると同時に、ぺしぺしと頭を叩かれる。

「起きてない」

「そつかー、起きてないか、それは残念だ。でもにつきーは寝ながらも会話が出来るみたいだね？　ねえお話ししようよ。暇だよ」

俺の頭を叩く強さをエスカレートさせながら、淡々と言う彼女は、大きな瞳をほとんど瞬きさせることなく起伏のない声音で言った。

彼女の名は、よの子ちゃん、という。

高校では同じクラスで、同じ部活で、同じ班で、今回のバスの席順は自由だが何だか流れで隣同士に座る事になってしまった女の子である

よく話すんだけど、未だに彼女の事はよく分からない。

「そっこだ！　につきー、お菓子食べる!？」

よの子ちゃんは何を思ったか、寝ようとしている俺の口にいきなり煎餅を押し付けてきた。

「うぐっ、たっ、食べねえよ！　痛いだろ！　ちよっ、口切ったぞ、もう……!」

「あ、いらんない？　そう…。ごめんね」

悪びれる事もなく、俺の口に押し付けた煎餅を自分で食べ始めるよの子ちゃん。

……やべえ、本気で意味が分からない。

何のつもりなんだろう。俺にお菓子をあげようとした、という体

裁を取った嫌がらせなんだろうか？ それにしてはちゃんと素直に謝るし、ていうか食うなよ。何事も無かったかのように食うなよ、それ。

彼女の意図を測りかねた俺は、とりあえずコミュニケーションを取ろうと試みた。

「……美味しいですか？」

「うんしよっぱい。鉄みたいな味がするよ」

「へえん、変わった煎餅だね。誰の血かな？ ……って、これ、今朝集合した駅で売ってたやつじゃないのか…？」

お土産用じゃないのかよ。きちんと包装された贈答用の高いやつじゃないか、これ。

「うん、美味しそうだったから。につきーは甘い物あんまり食べないからお煎餅好きかなーと思って」

「え……」

え。何これ。もしかして俺にあげる目的でわざわざバスに載る前に煎餅を購入したっていうのか。荷物になるのに。お菓子なんてコンビニで買えばいいだろ。何故にお土産用を早速食べるんだよ。

よの子ちゃんは、真っ黒い腰まで届く長い髪の毛先をいじりながら、眉上ぱつつんに切った前髪の下のこれまた真っ黒な大きな瞳で見つめてくる。

枝毛を探すような手付き（多分綺麗な髪だから枝毛なんかいないけど）の指先から「もじもじ」という効果音を発しているかのようにだった。

何だこれ。なんか食べないと悪い気がしてきた。

「一枚くれる？」

「え！ あ、うん良いよ！」

俺は余りお腹は空いていなかったが、煎餅の袋を破り食べ始めた。よの子ちゃんが嬉しそうににやにやしながら「たーんとおたべー」と言ってきた。鳩に餌やるおばさんか。

あつという間に煎餅を食べ終わった俺に、よの子ちゃんが話しかけてきた。

「につきーそろそろ眼が覚めた？」

俺は再び眼を瞑って答える。

「食べてる間は覚醒してた。悪いけど、また寝させてもらうからな。昨日あんまり寝てないんだ」

途端に、よの子ちゃんの目がきらきらした。

「え！ 本当？ につきーも！？ いやぁー実は、私も恥ずかしながら、修学旅行が楽しみすぎて眠れなかつたんだよ。明け方まで眼えギンギンしてたね！」

「俺は別に今日が楽しみで眠れなかつた訳じゃないからな！」

一緒にすんな！ 小学生かよ！

「……何で寝てないの？」

よの子ちゃんが可愛く首を傾げてきた。

「え、いや、それはその」

「なになに？ 教えてよ。につきーの駄目人間ぶりは十分に知ってるから今さら何言われても驚かないよ」

「……ありがとっ、よの子ちゃんは俺の良い所も悪い所も全て受け入れてくれるんだね」

「うん、勿論だよ、ゴミ虫人間のにつきーでも私の大切な友達だからね」

すげえ釈然としない。

「で、何してたの？」

俺は視線を反らして答えた。

「……………ネットゲ」

「廃人？」

「流石に廃人にはなつてねーよ！ 勝手に嫌な言葉付け足すな！ 今日だってちゃんと学校行事に参加してるだろ！ 俺を可哀そうな人にすんなよ！」

「とにかく、俺は眠い。修学旅行をバスの中まで満喫出来る元気

もない。だから着くまで寝る。お休み……」

そして、俺は眼を瞑った。

そして沈黙。しかし、それも長くは続かない。

「あ、見て見て富士山が見えるよ！ ねえ！」

「嘘つけ。まだバスが出発してから二十分も経っていないのに俺たちの住んでるド田舎から東京に着く訳ねーだろが」

よの子ちゃんは何を思ったか、俺の髪を一本一本引き抜き始めた。

「なんだぁー起きてたんだー」

ぶちぶち。

「お前がうるさいから眠れないんですが」

ぶちぶちぶち。

ていうか痛い！ 抜くなよ人の毛髪！

よの子ちゃんはようやく俺の髪の毛を抜く手を止め（怒らない俺は心が広いと思う）笑顔で言った。

「につきー。眠れない時は羊を数えるんだよ。よし、私が数えてあげるね。につきーはリラックスしてイメージしてみて」

羊？ 確かに、眠れない時は羊を数えるというのはよく聞く。効

果のほどは知れないが、誰でも一度はやった事があるだろう。

ていうか、ここで駄目って言ったなら、余計騒ぐんだろっな。

「……ん。分かった、なるだけ静かに頼む」

俺が頼むと、よの子ちゃんは満足そうにならずいて、囁くような声を出し始めた。

「羊が一匹… 羊が二匹…」

俺は広い牧場に、もこもこした羊が一匹ずつ柵を飛び越えていく様子を想像した。

「羊が三匹… 羊が四匹…」

よの子ちゃんの囁き声は、甘く耳に絡みつくような声だった。

……いつもこのくらい静かにしてれば可愛いのに。

「羊が五匹… 羊が六匹…」

瞼の裏では、のどかな草原と温かな日差しのもと、だんだん羊は増えていき、めえめえと眠そうな声で鳴く。

少しづつ身体が重くなり、眠くなってきた。

「羊が七匹… ヤギも一匹…」

…………… 山羊…?」

「羊が八匹… 羊が九匹…」

…………… やぎは？」

「羊が十匹… ヤギがもう二匹増えて…」

…………… なんだこれ。」

「ガチヨウが何匹か加わり、動物たちの脚は合計で七十本になりました。さあガチヨウは何匹加わったのでしょうか…?」

……………

「…………… 九匹？」

よの子ちゃんは両手を口に添えてにやにやしている。

「ピンポーン。だ〜いせ〜いか〜い」

「眠れねえよっつ!」

鶴亀算なんて久々にやったよ! (ていうか羊と山羊の数が分つて  
る時点で問題になってないけど!)

そんな感じで、俺の修学旅行はスタートした。

## パーキングエリアで休憩

「わぁー。見て見てにつきー、東京スカイツリーだぁーっ！」

「あれはただの送電鉄塔だよ、よの子ちゃん」

俺たちの乗ったバスは、高速道路の途中にあるパーキングエリアで休憩時間に入っていた。

道路脇に建つ大きな灰色の鉄塔を指差しながら、無邪気に笑うよの子ちゃん。

「あそこから日本中のテレビに地デジの電波が流れているんだね」

「いやいや、近くのご家庭に電力を供給してるだけなんじゃないかな」

「やだなぁーにつきー、話題のスカイツリーがそんなしょぼい役目しか果たしてない訳ないよ。もう、お馬鹿だなぁ。ちゃんと新聞とか読んでるの？」

「……もう俺はお馬鹿で良いや」

よの子ちゃんは座席から立ち上がりニヤニヤしながら僕を振り返った。

「につきーはトイレ行かないの？ この先休憩ないよ」

「俺は良いよ。睡眠不足のせいで立ち上がる体力すらない」

「ネットゲの中ではHPの高さが武器の僧侶なのにね」

ほっとけよ！

「ねえ、一人でバス降りるのやだよー。みんな群がって降りてるんだよー。トイレ一緒に行こー」

よの子ちゃんは俺の制服の袖をひっぱり、無理やり立たせようとする。

「あぁーもう、HPないって言ってるだろ」

「……ザっ、……ザオリクっ！」

いや、死んではいけないからな！

よの子ちゃんが騒ぐと周りのみんなに迷惑がかかるかも知れない。

ていうか場合によってはおれも怒られるかも。

「仕方ないな、俺はお土産でも見てるから、さっさと済ませてくるんだぞ？」

「はいはい！」

そう返事をして、彼女は勢いよくたんたんつ、とバスのステップを降りて行った。

嬉しそうにしているよの子ちゃんだが、ここではたと疑問に思う。連れションには普通女友達を誘うものじゃないのか？

……友達いな、いや！ そんなことないよな！

彼女だって部活の連中とは普通に仲良くしてるし！

俺とよの子ちゃんは、自販機の並ぶお土産屋の前で一旦別れて、俺は一人、食堂も兼ねたお土産屋の中へ入って行った。

お土産コーナーを冷やかしてから、まるで駅のキオスクみたいにこじんまりとしたお菓子や弁当を売ってる一角へ寄った。

「……煎餅のお返しでも買ってやるかな」

よの子ちゃんて何が好きだったけ？

女の子だからやっぱり甘い物か？

悩んだ挙句、俺は「カラーゲン入り」と書かれた酸っぱそうなグミを手取る。OLのバッグにでも入っていそうなキラキラしたパッケージで買うのがちょっと恥ずかしい。うーん何味が良いかな。ピーチとブドウを両手に取って思案する。よの子ちゃん戻ってきたから何味が良いか訊こうかな？

あれ、そういえば遅いな……

遅いのを心配して俺は入口の方を振り返る。

「……っ！ うおおっ！」

すぐ真後ろに、よの子ちゃんが仁王立ちしていた。

またもやニヤニヤしている。

「……何してるの？」

よの子ちゃんの顔が、眼と鼻の先にある。彼女の呼吸する息が顔にかかるのを感じられるくらい近い。

近いつて。

「お肌に良さげな女子っぽいお菓子を手に『どっちが良いかしら』と言いたげな顔で悩むにつきーを観察して楽しんでいたの」

そんな、誤解だ、俺が食べたいんじゃないのに。

「コラーゲンは良いよね。につきーも美肌に憧れていたんだね。」

そのグミは手軽にビタミンとコラーゲンが取れる女の子に大人気のお菓子だよ」

「へえそっか、詳しいね。よの子ちゃんもこれ好き？」

「あんまり」

……がーん。

コラーゲンってさあ、と、よの子ちゃんが切り出す。

「お肌の水分を保持するとかって、基礎化粧品とか食品に取り入れられているんだけど、実は落とし穴があってね」

「うん？」

よの子ちゃんはがっかりするような蘊蓄に詳しい。

またぞろそういう話だろうな、と思いつつ黙って聞く。

「化粧水やパックに入ってるものは意味ないんだって。コラーゲ

ンは分子が大きくて毛穴からは絶対に浸透しないから、経口摂取するしかない！……んだって！」

彼女は仁王立ちのままドヤ顔をした。

「じゃあ、このグミは一応効果あるってことだね」

俺はポジティブにとらえて言葉を返し、結局ピーチ味の美肌グミと、よの子ちゃんが選んだお菓子を三つも買ってあげて（やっぱり俺は心が広いと思う）、二人でバスへ戻る事にした。

そろそろ休憩時間が終わるからか、パーキングエリア内は一直線にバスへ戻ろうとする生徒がわらわらとひしめいていた。

その中を二人並んで歩いていると、よの子ちゃんがさっきの送電鉄塔を指差した。

「につきー、あれ何だったけ？ さっき言ったけど、ド忘れしちゃ

った！」

「ああ、あれ？ 東京スカイツリーですか？」

「え？ 何？ 聞こえない！」

「だから東京スカイツリーなんだろ！ あれ」

周りは学生たちのお喋りでざわわしていた。よの子ちゃんは耳に手を当てて申し訳なさそうな顔で、騒音を掻き分けるように叫ぶ。

「あー、ごめん聞こえない！ もっかい言って、あれ何？」

「東・京・スカイツリー！」

よの子ちゃんに負けじと、指を指しながら思わず大声で言った俺の周囲から、くすくすと失笑が漏れてきた。

「ええ〜？ につきー何言ってるのー、あれただの送電鉄塔に決まってるじゃーん。やっただ恥ずかしい〜」

……あれ？

「あれがスカイツリーな訳ないって。まったく無知だなあー。まだ東京にも着いてないのに、よっぼど楽しみなんだね〜」

周りの生徒たちの中には同じクラスの奴らも交じっている。

ぷぷっ、あいつアホかよ

そんな声が聞こえてきたような気がした。

きつと空耳ではない。

目の前の彼女は、長い髪をくるくると人指し指に巻きつけながらニヤニヤ笑っている。

「いやっ、違っ！ 俺はあれがスカイツリーだなんて思ってないぞ！ よの子ちゃんが頑なに言い張るから……」

「え？ 言ってるじゃないよ。自分の勘違いを人のせいにしちゃって。

その器の小ささが余計恥ずかしいよ」

俺は赤面する顔を抑えて早足でバスへ向かった。

「さつき買ったお菓子やらねーからなっ！」

「ええー！？ 酷い！ ケチ！ 馬鹿！ 美肌僧侶！」

美肌僧侶ってなんか一番厭だ！！

## 休憩中怪我人が出てしまいました

俊敏なよの子ちゃんの手から、先程買ったお菓子を死守しつつ座席へと戻ると、見慣れた顔が待っていた。

「あ……、錦君……」

窓側のよの子ちゃんの席、その隣の廊下側の俺の席、そのさらに隣、俺の椅子の横にある補助席を出して、ちよこんと座っていたのはふわっとした内巻きボブのやたら細い女の子。

「もつちーだ!!! わーー!」

よの子ちゃんが狭い通路で無理やり俺を追い越して、もつちーと森乃ちゃんに駆け寄った。

……「わーー!」じゃねえよ。

よの子ちゃんは懐に手を入れてサツ! と平たい物を取りだす。

「もつちー! お菓子食べ ……」

「ストップ! いきなり食わせるんじゃないっ!」

俺は煎餅を持ったよの子ちゃんの手首を掴んで制止し、そのまま肩に手を掛け、奥の窓側の椅子に押しこむように座らせた。

「ぎゃーー!」

大袈裟に叫ぶよの子ちゃんと、そんなやり取りを見て苦笑いする森乃ちゃん。

俺は森乃ちゃんに向き直る。

「さて、どうしたの? 森乃ちゃん」

と、言いながら、俺は森乃ちゃんの膝から真っ赤な血が流れている事に気が付く。

「う、うんっ、あのね、実は、さっき、バス降りるとき、転んじやって……」

森乃ちゃんは口元に手を当てながら顔を赤くして答えた。

彼女は別に恥ずかしい事をしてる訳でも何でもないのだが、元々引っ込み思案なので、誰かと会話するだけでこのように赤面して

しまつのである。

森乃ちゃんは見ためどおり、体力がないらしく、ちよくちよく体調を崩しては俺に付き添ってもらって保健室へ行く。

しかしそれ以上に、ぼーっとしているせいか不注意による怪我の方が多く、何も無い所で転んだり、調理実習で手を切ったり、通路で自転車に轢かれたりするのだ。

俺は廊下にしゃがみ込んで膝を見ながら尋ねる。

「傷口は、洗った？」

「ううん、降りてすぐ転んじゃったから、痛くて水道まで歩けなくて……。何とか席まで戻って来たの」

「うう、いたそー。また派手に擦り剥いたね……。さあ出番だよ

“万年保健委員”につきー！」

よの子ちゃんは、びしっ！と、前方の座席を指差し、俺に出勤命令を下す。運転席の真後ろ、担任の先生の席まで行き、救急箱を取りに行けと云うことだ。

そう、よの子ちゃんの言うとおり、俺は実は一年の頃からずっとクラスの保健委員で、そのうえ三年生と云う事もあり、保健委員会では副委員長という役職も務めているのだ。

保健委員をしているのはじゃんけんて負けたからとか云う、「やる気のない主人公」ぽい理由からではない。驚くなかれ、俺が立候補したからで、

理由だって至極まっとうなんだ。

「錦君、その、いつも迷惑掛けて、ごめんなさい……」

「もっちー……」

「迷惑なんかじゃないって、怪我してんだから遠慮すんなよ」

「さすがにつきー。一見馬鹿そうなのに実は医学部志望の医者家系」

「赤点常連のよの子ちゃんに馬鹿そうとか言われたくないんだけどな……」

家系とか、本当は重荷なんだけど。

怪我してる人を放っておけないのは、昔からの性分だ。保健委員になるのと医学部へ行く事はあんまり関係がないし、何の経験にもならない。しかし、先程言った通り、怪我した人や具合悪そうな人を見過ぎせないのだ、俺は。

「あ、ちよつと待った」

救急箱を取りに行こうとした俺の背に、よの子ちゃんが思い出したように声を掛けた。

振りかえると、不思議とよの子ちゃんはいつものお気楽そうなにやにや顔ではなく、少し暗い目をしていた。

「につきー。私急にバス酔いしてきたからから、ついでにビニール袋と水と酔い止めと浅田飴と、それから先生に私の病状をしつかり報告し、高速道路だけど窓を開けても良いですか？ って聞いてきて」

え……？ バス酔い？ 何だよ急に沢山用を言いつけて。

「さつきまでめちやくちや元気だったじゃないか。しかも浅田飴は風邪薬であつて乗り物酔いには何の縁も無い薬じゃないか。まだお菓子食べ足りないのかよ」

甘くて美味しい浅田飴。でも今時救急箱に置いてるのか、そんなの。

「いーから、さつさと、いや、……ゆっくり行つた！」

よの子ちゃんは僕をねめつけるように言い放つ。

その隣では森乃ちゃんが心細そうによの子ちゃんを見ている。

……「ゆっくり」って何だよ？

僕が刹那、よの子ちゃんの訳の解らなさにフリーズしていると、森乃ちゃんがおずおずと口を開いた。

「私は、大丈夫だから、その、錦君は、あんまり急がなくて、良いから。……」

森乃ちゃんまで何なんだ。

俺は曖昧に頷いて、救急箱を取りに向かった。

そんな事言われたって、森乃ちゃん怪我してるんだから、急がな

いと。

.....

「あの、よの子ちゃんは、何か、私に話したい事でも、あるんだよね？」

そう訊かれて、よの子は困ったような心配そうな顔で森乃の顔を覗いた。

「うん、につきーのいないとこでね。につきー察しが悪過ぎ」

「はは……。でも、そんな所も、私は……。その」

森乃が控えめに口元だけで笑う。

二人の間には何とも言えない沈黙が流れた。

「もつちーは、あんなのどこが良いの？」

「ええっ！」

途端にかあつ、と顔を赤らめる森乃と、それを見て、先程と変わらず呆れたような心配するような複雑な表情を浮かべるよの子。

しかし、よの子は「ううん」小さく唸って、森乃に向き直る。

「本題に入るけど、もつちー。『こーゆーこと』続けてると、いつか本当に死んじゃうよ？」

物騒な言葉を口にするよの子に対して、森乃は俯くだけで何も答えない。

「今日は擦り傷、昨日は打撲、一週間前は彫刻刀を手にブツ指して、どこもかしこも生傷だらけ。去年の夏休みなんかわざわざにつきーん家の耳鼻科に入院しに行ったんだって？ ……私、すごく心配してるんだからね」

森乃は震える両手で襷スカートの裾をぎゅっとなつかみ、よの子の方を見ずに蚊の鳴くような声で言う。

「だ……。だって、それはうっかり、怪我、しちゃったから……」

「うっかり……。ねー。もつちーと同じ中学の子に聞いたけど、高

校入る前っていつか、につきーが保健委員だつて知る前はそこまで『うっかり』してなかったー……って」

話を聞くうちにどんどん脈拍があがったようで、森乃は胸を押さえながら全力疾走の後のように大きく呼吸をしている。

「それ、錦君には、言わないで……。お、願、い、だから！」

「い、言わない！ 言わない！」

よの子ちゃんは、首と両手を大きく左右に振る。「まあ、正直、何度につきーに『気付けよっ！』って言って殴ってやろうかと思っただか知れないけど」と軽口を叩くものの、表情は相変わらず、腫れものに触るかのように、ただただ困ったような笑顔をするだけだった。

「でも、あの一。そんな痛い思いしないで、普通に声掛けてみたら……」

「でっ、出来ない！ 用もないのに話しかけるなんて……」

森乃は俯いたままぶんぶんと首を振り、キノコのようなボブを揺らす。

そして、潤んだ瞳でよの子をちらりと見やった。

「よの子ちゃんには、分からないよ……」

「ご……ごめん」

「……当たり前みたいに、話しかけて、仲良さそうに、楽しそうに、盛りあがってる。よ、よの子ちゃんみたいな、明るい子には……分からないんだよ……」

よの子は森乃の必死そうな剣幕にたじろぎ、「うっっ！」と声を漏らした。

「あの、前も訊いたけど、よの子ちゃんは、本当に、錦君の事……」

よの子は心底呆れたような顔で、頬杖を突いて見せながら「はあ、ん」と返事をする。

「すーきーじゃーないー」

森乃は両手でもじもじと指を弄っている。

「ほ、本当ね？」

「……………」

その時、よの子は錦がバスの廊下を引き返し、自分たちの会話が聞こえるくらいの距離まで近づいて来ていたのに気が付いた。

その顔は、一見無表情で、それでいてどこか脱力していて、しかし心配そうに森乃を窺うような顔だった。  
本当は優しい人の顔だった。

そんな事を考える内に、よの子はまたいつもの不敵なにやにや顔に戻り、森乃に一呼吸を送れた返事を返した。

「……多分ね」

「うん。つて、……え!？」

錦は黙って補助席に座る森乃の前にしゃがみ、手当を始めた。

……………

「ま、今の所は私のおもちゃっただけだけどねー」

戻ってくるなり俺を見ながら、よの子ちゃんがにやにや顔で森乃ちゃんに言った。

補助席の前に跪く俺と、椅子に座るよの子ちゃん。

態度だけでなく位置的にも見下される形になるのが少し癪だった。

「何の話だよ！ 明らかに俺を見ながら言ってるな！」

「さあー？ 何の話だろーねー？ ガールズトークを詮索するなんて、野暮だなーにつきーは。ねー、もっちー？」

「えっ、えええとっ、う、うん」

え。「うん」つて、そんな。

……森乃ちゃんにまで野暮と言われちゃあ、素直に反省するしか

ない。

俺は嘆息し、黙って森乃ちゃんの骨の浮き出た膝、その傷口にマキロンを塗っている、唐突に上からか細い声が振って来た。

「あ、あのっ」

「うん？」

絆創膏を貼りながら声のした方へ目線を上げると、紅く染まった頬をした彼女の、黒目がちな瞳と視線が真っ直ぐにぶつかった。

しかし、反射のように一瞬で反らされる。

「錦君、あ、ありがとう……」

「ああ、どーいたしまして。怪我には気をつけなよ」

窓際の席には足を組んで頬杖をついたよの子ちゃんが、何故か呆れたような顔で薄眼を開けてこちらを見ていた。

「あーあ、につきーサイテー。何にも知らないからってさー」

よの子ちゃんはプイッと窓の外を向く。

「は？ 何だよ、急に……」

よの子ちゃんは、ぶすつとした顔で、振り返り、一息に言い放った。

「もつちーの前に跪いて優しく消毒するふりをしつつ膝の間の隙間、そこから微かに覗くスカートの中の秘密の花園を見んと卑猥な表情で目を凝らしていたにつきー、サイテー」

「見てねーし。そんなに簡単に見えねーし。」

そんなにセキュリティが低いのは漫画の中だけだ。現実はその簡単にパンチラなんかする訳がない。

しかも森乃ちゃんは女の子らしくきちっと内股で座るうえ、両手はしっかりと腿の上に揃えて置くので、

……それはもう嚴重で嚴重で、内腿すら見えませんでしたよ！

## そろそろ高速降りる頃

「そういえば、」と、森乃ちゃんの手当てを済ませた俺は、自分の席に戻りながらよの子ちゃんに尋ねた。

「酔ったって言うてたよな？ 一応酔い止めとビニール袋と、あと、水とかポカリの類は無いが、お茶でよければさっき俺が買った奴があるから……」

言いながら、よの子ちゃんを見やると、不思議そうな顔できょんとして俺の顔を見つめ返している。

「え？ 酔った？」

「錦君…、本当に持って来たんだ……」

よの子ちゃんと森乃ちゃんが両側から挟みこむように視線を投げかける。

「あ、あれ？」

俺が疑問符を浮かべていると、よの子ちゃんは気を取り直したようにへらっ、と笑う。

「えー、……もう治ったよーん」

……と言つて、欧米人の用に両手の平を上に向け肩を竦めて見せた。

あんだけ用事を言いつけて置いてあっさり治るんかい。ていうかそれは本当にバス酔いか、俺をこき使つて楽しむための仮病なのか、なんか怪しいとは思いつつ本当だったら可哀そうだからちゃんと看病してあげようと思つた俺は馬鹿なのか、阿呆なのかよ。

そんな感じのまとまりのない理不尽さを感じてジト目で睨みつけた。

「いや、治ったって何だよ」

「だって、治ったんだもん。生命の神秘、奇跡の生還。末期ガンがいつの間にか消えちゃったとかいう原因不明の感動回復ストーリー、良くあるじゃん。につきーは苦しんでいた私が奇跡の復活を遂

げても嬉しくないの？　ここは手放して喜び、生きているという奇跡を祝福しあうべきじゃないかな」

「いや、そんなレベルの話じゃないだろ」

感動しねーよ。

まったく、よの子ちゃんはまた俺をからかって。

「もういいよ。はいはい治って良かったな。この件に関しては深く追求しない事にするから。でもあんまり人をからうかうなよ」

「につきー、怒んないの？」

「何だよ。怒っても仕方ねーからな」

よの子ちゃんはまたにやにや顔で「ありがとう」とだけ言って可愛く肩を竦めた。

そこで、補助席側から控えめに「あの…」とか細い声が出た。

「あ、あの……、わ、私ちよつと酔ってきちゃったみたい、で、

その、何か、飲み物とか、あ、あつたら……その」

「ん？　今度は森乃ちゃんが酔ったのかあ？」

「につきー、もしかして疑ってるのー？」

「え、いや、疑うってか、何でみんなそんな急に酔ったりすんだよ!？」

「わわわ、私は、嘘なんて吐かないよ……！　錦君をからかったりなんて、よ、よの子ちゃんじゃあるまいし……!」

「そうそう私じゃあるまいして、おおい！　もっちー結構はつきり言うよね!」

よの子ちゃんはちよつと傷ついたような顔で、俺の席を越え、森乃ちゃんの補助席まで腕を伸ばして突っ込む。

俺はやれやれと、ため息をつきながら、学校指定のスクールバッグから先程買ったペットボトルのお茶を取りだす。

「え、あ、良いの？　に、錦君のお茶……!」

森乃ちゃんは顔を真っ赤に火照らせて両手を胸の前でわたわたと振った。多分、「申し訳ない」とか思ってるんだろう。森乃ちゃんらしい。

それにしてもやけに顔が赤い。心なしか熱っぽく眼も潤んでいる。酔ったつていうより風邪かなんかじゃないだろうか？

「に、錦君の……！！」

「なーんだ、未開封なんだ」

よの子ちゃんがぼそりと呟くと、森乃ちゃんが一瞬、フリーズした。

「ああ、さつき買ったばかりだからな。あ、森乃ちゃん、飲みかけとかじゃなーから、安心して」

そう言っただけは、ぽんっ、と森乃ちゃんの手には五百ミリのペットボトルを手渡した。

先程、よの子ちゃんに「森乃ちゃんのスカートの中を覗こうした疑惑」を掛けられたので、この期に及んで飲み掛けのペットボトルなんか渡したら「間接キスをしようとした疑惑」まで掛けられかねない。

そんな事になったらいよいよ変態の烙印を押されてしまう。

「あ、……ああ」

森乃ちゃんはぎこちない動きで受け取ったペットボトルを握り直した。何だか急に顔色も平常時のように白くなり、心なしか視線を落としている。

もしもこれが漫画だったら、背景には垂直な縦線と共に「ずーん」と書かれていそうなかんじだった。

「あり、がとう……」

そう言っただけ、森乃ちゃんはペットボトルを開栓し、正面を向いてちびちび飲み始めた。

くす、くす、と窓側から微かな笑い声が聞こえてくる。

「間接ちゅーに気を使うなんて、につきーも変な所で気を使うんだね」

長い黒髪の先を、枝毛を探すように弄りながら窓の外を眺めるよの子ちゃん。俺から顔をそむけてはいるが、窓ガラスに映った彼女の顔はお決まりのにやにや顔だった。

「よの子ちゃんは、もう大丈夫なのか？」

「へ？」

「具合」

急に振りむいたよの子ちゃんは、やっぱり整った顔立ちをしている。

「につきーったら、まだ心配してくれてるのー？ 治ったって言ったのに。そんなに人を心配しまくって、キリないよー？ 今日はやたらと優しいねにつきーは」

「今日はって、何だよ」

俺はいつも優しいだろうが。なんて。

「につきー、こういうジンクス知ってる？」

「ジンクス？」

よの子ちゃんとはびつきりの、人を食ったような笑顔をした。

「普段目立たない人が急に良い人になったら、次の週に死ぬ」

“次週、注目の急展開！” ってか？

「……………それはアニメで言う死亡フラグの事だろっ!？」

「しゅ、週間連載の、漫画とかも……………」

森乃ちゃんのくぐもった控えめな笑い声が聞こえてきた。

## やっと着いたよ東京都

高速道路を下りたバスは、見慣れないビル群の中を縫うように走り、周りの生徒はぼちぼち降りる準備に入っていた。

「『リストカット』」

「……『吐血』」

「『罪』!」

「み、みー、『水責め』って、アリか？」

森乃ちゃんがおずおずと尋ねた。

「何、してるの……?」

『闇しりとり』

俺とよの子ちゃんが声を揃えて答えた。

闇しりとりとは、よの子ちゃんが考えた露悪趣味丸だしのオリジナルゲームだ。

「オリジナル」と本人は言っているが、あくまでしりとりなのでオリジナルと言うほどではない、ルールのアレンジと言った方が相応しい。

ルールは簡単。闇っぽい言葉しか使ってはいけない。

よの子ちゃんは、相変わらずのにやにや顔で元気いっぱいだった。

「『メランコリー』!」

「『リストカッター』」

「えっ! それさっき言わなかったっけ!？」

「『カット』と『カッター』は別カウントだろ」

「くっ、ずるいぞにつきー! そこまでして勝ちたいか、まったく人間としての器が狭いよね。やれやれ」

な……何だこの言われようは。

よの子ちゃんの方がよっぽどムキになってるじゃないか!

「も、もう着く……みただよ、二人とも」

森乃ちゃんは窓の外を指差しながら、少しだけはしゃいだように

笑う。

ああ、……森乃ちゃんは可愛いよな。

控えめで、素直で、大和撫子で、今時流行りのポプカッタだ。

「た、た、た……タイホー！」

大和撫子とは対照的なよの子ちゃんが2ちゃん用語を叫ぶ。

「『逮捕』、な。次は『ほ』か……」

バスは駅前のターミナルに次々と停車し、その止まった順に生徒たちがわらわらと降りては先生に誘導されて駅へ入って行く。

「よの子ちゃん、降りる準備しないと。ほら、お菓子仕舞って」

「はいはい。次につきーの番だよ『ほ』！」

「考え中だ。はい降りた降りた。あ、森乃ちゃんはもう脚平気？歩けるか？」

「う、……うん、平気、ありがとう」

そんなこんなでよの子ちゃんをせっつくようにバスを降り、先生に怒られながらも皆たらたらと整列しだす。

そうしていると、同じクラスの女子が、遠くから森乃ちゃんに手を振って来た。

「おーい、武田さん！ 二班はこっち」

班ごとにまとまり出した列から活発な声で呼ばれた森乃ちゃんは、焦ったように返事をするが、多分向こうには聞こえてない。

「じゃ、じゃあ、私は、あっちだから……」

「おう。気をつけるよ。あ、替えの絆創膏渡しとくな、はい」

俺が救急箱から取り出して手渡しすると、森乃ちゃんはまたも真っ赤になって両手で受け取った。

「あ、あ……、あり、がとう」

そして、小走りで二班の列へ合流しに行った。

「につきー、私たちも早く並ぼ」

俺とよの子ちゃんは同じ班、五班である。

それにしても、クラスも部活も班も一緒なんて、腐れ縁にもほど

があるよなあと思ってしまう。

班は、席替えの度に代わるものなので、よの子ちゃんと同じ班になった事は一年生の頃から今を含めて二回しかないのだが、それでもやはり、一年の四月に初めて逢った日、席が隣同士だったと云うのは、縁つてもものを感じずにはいられない。

「女子出席番号九番、竹田よの子です」

あ、同じ苗字だ。

きつと向こうもそう思ったのだらう、言った瞬間に俺を一瞥した。入学式の後、男女男女と交互に出席番号順で自己紹介をして行くなかで、俺の次に立ったのがよの子ちゃんだった。

中身を知る前は、隣になった女子がテレビに出てくるアイドルと大差なくらいに可愛くて、心の中でガッツポーズをしたんだよね。私立の高偏差値進学校ということもあったし。

俺は「女の子は大学に上がるまでは、勉強の出来る子よりも出来ない子の方がお洒落で可愛い事が多い」という厭らしい偏見を持っていたので、正直その手の青春には期待していなかったのだ。

中身を知る前は。

「……まあ、期待はあっさり裏切られて青春なんて無かったけどね」

「はい？ 何」

「いやいや何でも。こっちの話」

何か、懐かしいな。もう三年か、修学旅行中だったのが身にしみてくる。

「大丈夫？ 見えないものと話しているの？ それとも第二の人格と会話してるのかな？ 要するに邪気眼なの？」

「邪気眼じゃねえよ！」

「くくく、さあにつきー、闇のゲームを続けよう。貴様は『ほ』という一文字に束縛され、その言葉を考えつくまで前へ進むことは出来ないのだ！！」

「お前が邪気眼かよ!？」

ていうか闇しりとりまだ続いてたのか!

「どうした? 暗黒の遊戯を続けるのが恐くなったか!？」

しかし貴様はもはや逃げることなど出来はしない! 私との煉獄の輪舞曲は、どちらかが五十音表の最後の文字を唱えるまで永久に終わりはしない!」

Rondって読むな!

俺はよの子ちゃんの疲れを知らないテンションに辟易し、眼頭を押さえて深く息を吐いた。

よし。

「『ホールドアップ』!」

俺は右手をよの子ちゃんのおでこの前に構え、中指に力を込めつつを親指をストッパーにする。

「う、動くなつて言うのね? んー、『闇』かどうか微妙なライン。……という言いがかりをつけることも出来るけど、一応犯罪っぽい言葉だから多めに見てあげるよ。それにしてもまたも卑怯な手を……しかも『ぶ』う? 『ぶ』……」

よの子ちゃんは両手をあげ、上目づかいで俺をねめつけながらもにやにや笑いは崩さない。しかし、追いつめられて状況で一筋の冷や汗が垂れる。

「特別大サービスだ。『ぶ』じゃなくて『ぶ』でも『ぶ』でもいいぞ」

「……ぶ、ぶ、……ぶ、ぶ?」

よの子ちゃんは苦悶の表情を浮かべている。俺は助け舟を出す事にした。

「ほら、あれだ。例えば何も悪い事をしていないのに暴力を振るわれそうになっている、そう、今みたいな状況の事とか」

「……ふっ、『不条理』だ!」

ぴんっ!

「正解」

良い音が響いて、よの子ちゃんはぱたーんと後ろに倒れた。  
でこぴんくらいで、大袈裟な。

## 整列中怪我人が出てしまいました

.....

武田森乃は回想に浸りそつと目を瞑った。

一年生の入学式、赤面症で口下手な自分がクラスに馴染めるかどうかは、きつとこの一日目にかかっている。

初めて教室に入った時の緊張感は今でも忘れられない。

しかし、あの人と出逢ったことで自分の心配ごとランキングはガラリと順位が総入れ替えされ、来る日も来る日もあの人の事ばかり考え続けた。

出席番号順に決められた席順で、自分の斜め前に座っていた彼を見た瞬間、「私はこの人に出会う為に生れて来たのだ」と思った。こんな近くに座っているなんて、きつと偶然じゃない。運命だ。

こんな私じゃ両思いになどなれないかもしれない。だけどそれでも良い。

私はこの人を知り、慕い、想う為に生れて来たのだ。

どうして好きになったのか、

どうしてこの人だったのか、

気付いたらもう恋をしていたから、理由なんか無い。

森乃は膝の絆創膏をなでながら嬉しそうに微笑んだ。

錦君

「モーリの！ まあた怪我しちゃったのかあ？ お前」

二班の列に並ぶなり、後ろから羽交い絞めにするようにして抱きついて来たのは、脱色した長い髪に切れ長の吊り眼をした少女だった。

「こ、琴子ちゃん……！」

「愛しの医者志望に優しくお手当して貰えたかあ？ ああん？」  
声を響めてねっとりとした口調でそう聞かれて、森乃は耳まで真っ赤になった。

琴子と呼ばれた少女に頬ずりをされ、森乃のこめかみには琴子の耳についた幾多のピアスが当たって少し痛かった。

「い、痛いよ……。もう、琴子ちゃん、わざとやってる、でしょ……？」

「はあん、お見通しかよ。流石親友。大好きだぜ森乃」  
「もー、や、めてっば……」

森乃は口では抵抗しながらもさして厭そうではない。いつものように赤面する事もなく、落ち着いて会話が出来ている。

どこからどう見ても、仲の良い女子二人がじゃれ合っている微笑ましいし姿にしか見えなかった。

「ちゅーさせる！ ちゅー！」

「あつ、もう！ やつ、やだつてばあー、か…噛まないで……」

絡もうとする琴子と笑いながら逃れようとする森乃。しかし、琴子は恋人繋ぎで手を結びながら森乃の

耳元で不敵に笑う。

「しかしよ、擦り傷なんて甘つちよろいだろ。治療なんか一回で済んじまう。やっぱり、自傷って限界があるよな。怖いもん。どうしてもブレーキが掛っちゃう。……でもよ、森乃もつと長期的に経過観察して貰いたいとは思わねーかあ？」

「え？」

パシッ！、と下から音が聞こえたと同時に、森乃は天を仰いでいた。平衡感覚がずれて、足払いされたと気付いた、直後。ぼき。

微かな音と共に強烈な痛みが指先に走った。

「……！」

森乃と琴子は、二人して駅の床の上に転んでいた。

琴子が森乃に覆いかぶさるようにして倒れたその体の下に、繋い

だ森乃の左手を隠して。

琴子のお腹の下では、森乃の薬指がおかしな方向に曲がっていた。倒れる瞬間、森乃の薬指は無理やり伸ばされて地面と垂直に立てられ、その上に琴子が押し掛かったのだ。

「……い、痛、あ……！」

眼に涙を浮かべた森乃の上で、ぱつと琴子が起き上がる。

「ごめーん！ 森乃、大丈夫？」

列の先頭から二班の班長の注意が掛る。

「ちよつと、二人とも何やってんの！ ふざけてないで早く並んでよー」

「ははは、ウケるー二人とも。何すつ転んでんのー。いちゃいちゃしすぎー」

周りのクラスメイトも笑う中、琴子は頭を掻きながら「いやー駅の床って滑るよなー、いひひ、やりすぎちゃったー」と軽口を言いながら、森乃の腕を掴んで立ちあがらせる。

森乃は痛みで歯を食いしばりながら涙を堪えて琴子を見た。

琴子は森乃に正面から抱きつくようにして方に顎を乗せ、そつと囁く。

「その指、段々腫れてくるから後で医者志望んとこ行きな。折れたんだから治療はちゃんとしろよ。病院に付き添ってもらって帰りにデートでもして来い。夜に皆が繁華街に繰り出す頃がいい。堂々と二人で抜け出せるぜえ。……いいか、夜まで我慢、出来るな？」

森乃は強く唇を結んで疼く薬指を押さえて、こくんと頷いた。頷いて残酷な親友を抱きしめ返した。

それを受けて、琴子はいひひと満足そうに笑った。

「いひひひ、あたしはいつでも森乃の見方だぜ。大好きだ。森乃」

零しそうになった涙の原因は、痛みだけじゃないのだと森乃には

解る。

.....

「ねえ、につきー。今日はこれから東京タワー見学で、明日からは班とか部活ごととかで自由行動、だったよね？」

「ああ、そういう予定だったな」

俺もその辺の細かい予定はうる覚えなので、鞆から「修学旅行のしおり」を取り出してぱらぱらと捲った。

「部活ごと、って珍しいよね。帰宅部の人どーすんだろ？」

「うちは原則部活は全員加入だろ。実質帰宅部の奴らも一応はどつかに籍を置いてんだからあぶれるやつはいないんじゃないか？」

それに、うちは部活動も盛んだから、クラスメイトよりもチームメイトと思い出作りたいてってやつが多くて、そういう要望があったから部活ごとの見学つてのが出来たらしいぞ」

「へー、そうなんだ。まあ、どっちにしろ、私は班でも部活でもにつきーのお守をしなきゃならないってわけだね」

やれやれーと、オーバリアクションで溜め息を吐くよの子ちゃん。

お守って……

お守って、どの口からそんな言葉が出てくるんだ……。いつも面倒見てるのは俺の方じゃないのか！？ 遊んであげたり、トイレに付き合ったり、バス酔いしたとき介抱したり、お菓子を片づけたりとか……！

いろいろ面倒見てるよなーって、あれ……

「……何か俺、お母さんみたいだな」

なんて、自虐してみた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0563x/>

---

よの子ちゃんと雑談

2012年1月15日00時49分発行